ヴェブレンとダーウィニズム
——人間行為論を中心に——

石田 教子（日本大学）

はじめに

非主流の異端の経済学者というのが，久しくヴェブレンに貼られてきたレッテルであった．このような解釈は，ヴェブレンの最初の包括的伝記である Dorfman（[1934] 1972）に端を発していた．しかし近年の研究において，この極端な位置づけは次第に相対化されるようになってきた．それは，一方では彼の経済思想の独創性を広めるために大いに役立ってきたとはいえ，他方で彼の思想史上の適切な位置づけを困難にしてきたからである．ノルウェーの移民の子として生まれ，文化的差別を受ける環境に育ち，英語もろくに話せず，親しい友人もいなかったゆえに，アメリカ資本主義社会への批判の眼識を高めたというドーフマン神話——非主流神話——は，近年の研究により大部分が誤解に基づいていたことがわかってきている（Edgell 2001）．しかし，ヴェブレンの伝記的解釈の修正は進んできたものの，この非主流神話の修正を方法論の次元において掘り下げようとする研究はまだ少ない．

そこで，この問題に取り組むのが本報告の課題である．そのために，本報告ではヴェブレンのイギリス経済思想史解釈を読み直すという方法を採った．この方法は，従来の研究のように正統派経済学に対する批判的側面を中心にヴェブレンの議論を考察するのではなく，肯定的評価をも拾いあげ，それによって経済学が進むべき道と彼が考えていたものを浮き彫りにすることを目指す．またこの試みによって，ヴェブレンが実際に経済理論を展開する上で，自身の方法論をどのように活かしたのかという問題についての見通しも立ててみたい．

本報告の概要を先に述べると次のようになる．ヴェブレンは確かに正統派経済学の方法を厳しく批判したが，それを拒絶するだけではなかった．彼は，カントやヒュームの思想を手がかりにして，人間行為の経験論的定式化の方法を学ぶとともに（I），彼が古典派経済学の基礎にあると見なしていた功利主義思想に，自然を主とした目的論からの部分的離脱を見た．この離脱によって，経済学が自然を主とした目的論から脱し，経済現象のプロセスを機械論的に定式化し始めたことは，積極的に評価されるべきこととされた（II）．だが，彼によれば，経済学が科学であるためには社会における人間行為を主題としなければならず，その場合に経済学には二つの道が開かれている．一つは，人間行為の「量的範疇」を中心とした定式化であり，もう一つはその定式化を支える人間行為の「目的論的範疇」を定式化する方法である．正統派経済学が向かった道は前者であり，それによって後者の道は閉ざされようとしていたが，ヴェブレンが目指した道は後者であった（III）．これらの考察から報告者が示すのは次の 3 点である．①ヴェブレンは，正統派経済学を拒絶することで，まったく新たな枠組みとしての進化論的経済学を構築しようしたのではなく，イギリス経済思想に対する健全な

評価を下した上で，当時の経済学がすでに進化論的科学に近づきつつあることを指摘した．また，②この動向が進むとしたら，彼は，経済学の主題が人間行為の事実に即した定式化でなければならないと考えていた．③この方法論は，『有閑階級の理論』においても貫かれているとともに，人間行為を引き起こす因果関係を人間精神のうちに見いだす方法であった．

I 社会科学における経験論の方法：カント論とヒューム解釈を手がかりに

ヴェブレンは，博士論文を取得したころ，カント『判断力批判』を再構成し，社会科学における帰納的推論の有効性について論じた．目的論的推論ないし演繹的推論は社会科学の方法として有効ではない．だが，科学においては，単に事実を枚挙するだけでは一般的な命題を何ら提示しえない．人間には，何らかの概念に基づいて，単なる事実を超えた抽象的一般的な理論構築を行う能力がある．そのような意味において，カントが論じようとしたことは，帰納的推論を行う人間の認識能力——反省的判断力——であるとされた．日常生活における経験を役立て，道徳を幻想以上のものにするためには，将来予測を可能にする方法を採らねばならない．蓋然的な帰結を提示するにすぎないとしても，この目的にかなう唯一の方法は帰納的推論にほかならないというのがヴェブレンの主張であった（Veblen[以下 V と省略] 1884）．

これを，ヴェブレンが後に論じたイギリス経済思想史とつきあわせると，彼のヒュームに対する評価が，上記のカント研究から引き出された帰納的推論の方法に通じるものであったことがわかる．彼によれば，ヒュームの方法は，「時には批判的態度，また時には帰納的方法，そして時には唯物論的もしくは機械論的方法，さらにあまり適切ではないけれども，歴史的方法」であり，その特徴は事実問題の強調にあった．だが，「あまり適切ではない」という限定に見られるように，それは，事実を列挙するだけの歴史的方法ではなかった（V 1899a, 96-7）．カントと同じように，ヴェブレンは，経験の範囲を越えて原因と結果に関わる知識を定式化することには懐疑的であったが，そのように認識したからといって，一連の現象の因果関係を明らかにするという科学の営みを少しも否定しないのだと考えていたからである．そして，このことを両者に教えたのがヒュームであった．

ヴェブレンのイギリス経済思想史は，経験論的な社会科学の方法の重要性を浮き彫りにする試みでもあった．重農主義の科学的観点とヒュームのそれとの対比はその一例である．重農主義においては，自然的秩序の作用に主眼がおかれているから，人間の行為は，自然の法則に大きく制約されたものとして定式化される（ibid, 89-90）．それに対して，事実に即そうとするイギリス経験論においては，経験の範囲を超える定式化，すなわち，自然に目的を帰属させるような定式化を避けようとするから，自然の法則が人間に対して作用する力は相対的に弱まった．あらゆる事象を事実に即して考察することは，必ずしも「善なるもの」（ibid, 96）にしがみつくことではなかったか

らである．すると，おのずとそこに描き出されるのが，平凡な日常生活における人間であることは想像に難くない．これは，後に論じるように，あたかも自然に存するかのように思われていた目的を，人間が取り戻すプロセスともいえよう．したがって，こうしたヴェブレンの説明に沿えば，そこから人間本性の理解が歴史ないし社会研究の基礎であるという認識が生じてくるとの解釈も理解できよう．

この重農主義とイギリス経験論との比較からわかってくるのは，ヴェブレンにおいては，社会科学の主題が日常生活における人間の精神的側面に関わっていたということである．この視点は，人間と自然の関係をいかに捉えるかという問題と密接に関わっている．彼によれば，両者は主従の関係にあり，世界を動かすイニシアティブを与えられているのは自然であるか，人間であるのかのどちらかである．これは，初期カント研究以来ヴェブレンの社会認識に引き継がれている視点でもある．

道徳的に自由な人間（『実践理性批判』の主題）が，厳格な自然法則に制御された世界（『純粋理性批判』の主題）のなかで，事象のプロセスに入り込むことができたとしても，人間がそのなかで能動的に行為しうる可能性が示されなければ，人間は自然法則の歯車のなかの単なる作用因の一つにすぎなくなる．その場合，道徳的実践は幻想に終わらざるをえないだろう．ヴェブレンは，カントの第三批判の執筆目的がこの点にあったと考えた（V 1884）．社会における人間は，目的もなく行為する主体——単なる作用因——なのではなく，反省的判断によって熟慮し行為する能動的主体にほかならない．ヴェブレンは，すべての判断が道徳律へ向かわねばならないというカントの実践概念には従わないが，このカントの人間理解が，日常生活のあらゆる実践についての考察にも役に立つはずだと考えたのである．

II 功利主義的経済学の限界と意義

すでに見てきたように，重農主義的な自然を主とする目的論を捨て，事実問題に注目するとき，人間の問題を取り扱う余地が生まれ，経済学が人間行為の心理的動機を扱う道が開かれた．だが，その後のイギリス経済思想の展開を見れば，人間行為を扱いうるとしても，それを事実に即して定式化できるわけではないという問題が浮上してくる．ヴェブレンは，この問題がイギリス経験論の根底にある功利主義的な人間観に起因していると考えた．

ヴェブレンが功利主義的な人間観とスミスのそれを比較している部分は，この解釈を理解する手がかりである．スミスの場合には，経済人は，斉一的であるとはいえ，多義的——ある程度は事実に即している——でありえた．スミスの人間観が評価される理由は，スミスがその生産論に「物質的な生活手段の形成に向けられる人間の努力」と「金銭的利得に向けられる人間の努力および意志決定力」（V 1899c, 127）を組み込もうと尽力した点にあった．それに対して，その後の経済学においては，経済人は極端に抽象的な受動的主体として精緻化された．カント論においても強調されていたように，

目的をもたない人間は，自然法則のなかの歯車にすぎないから，自由な存在者でないばかりか，現実に即していない．それと同じように，経済学における人間が，たった一つの動機——金銭的利益を求める利己心——だけに縛られるとしたら，たとえ厳格な自然法則から解放されたとしても，多様な心理的動機をもち，自ら意志決定し自ら行為する現実の人間ではない．自然か，あるいは心理的動機かを問わず，両者は等しく決定論的世界だからである．新古典派経済学における人間像が受動的であるというヴェブレンの批判はこの点に基づいていたが，この問題が解決される方向性も示されている．（ヴェブレンは，より厳密には，快楽主義に代わる向性論に向かうのだが）J. S. ミルやベインによる功利主義の修正は，経済学が，精神的——すなわち能動的——「目的論的」（V 1900, 152）人間主体を描くための革新をもたらしたとされた．

この「目的論的主体」という概念については，先に述べたヴェブレンの社会認識に沿って補足が必要となろう．彼の社会認識において，人間と自然の関係が主従の関係にあることはすでに述べた．それによれば，自然が主であり人間が従とされるとき，その定式化は目的論的議論であるとともに，人間は受動的主体となる．それに対して，人間が主であり自然が従であれば，それは目的論を脱するとともに，人間は能動的主体とされよう．後者の場合においては，人間は，自然法則にただ制御されるのではなく，そこから抜けだし自らの意志で行為しうる能動性をそなえている．混乱を避けるために念頭におかれねばならないのは，目的因が自然から人間へ受け渡されるというような想定が，説明の手法として用いられている点である．ヴェブレンが人間主体を「目的論的」と形容するとき，人間はこの能動性をそなえていることを意味する．このように読むなら，経済人の抽象性および受動性を乗り越えるために，能動的＝目的論的人間行為——人間行為を引き起こす性向・本能——を説明することがヴェブレンの進化論的経済学の主題であったことも理解されよう．ただし，その目的因は，カントのように道徳律に導く牽引力をもっているわけではない．むしろそれは，ヒュームのように「必ずしも善なるものにこだわらない」限りにおいての能動性である．したがって，ヴェブレンが論じた，平凡な日常生活のなかで目的論的に行為する人間は，社会全体の便宜を図ろうとして行為する人間（V 1899c, 138）でもあれば，隣人と張り合っては相手を妬み，逆に相手を妬ませようと画策する人間（V 1899b）でもあった．

ところで，功利主義が経済学にもたらしたのは，狭隘な人間把握だけであったのだろうか．ヴェブレンの社会認識においては，人間を主とする理論の構築は，自然を主とする目的論からの脱却を意味していたのだから，究極的目的を主題の外へおき，累積的な進化のプロセスを機械論的に説明する科学への接近であることが認められなければならない．この「結果という見地というよりは，むしろプロセスという見地で現象を認識すること」（V 1900, 158）は，ヴェブレンの進化論的経済学の前提観念の一つであった．結果という見地が，究極的目的を予め前提することを意味しているのに対

して，プロセスという見地は，経済ないし社会を動態的に把握することを意味している．だとすれば，ヴェブレンの功利主義解釈は，抽象的受動的人間観は修正を要する問題として残されようとも，この前提観念については，功利主義が経済学にもたらした意義であるという評価であったと理解されねばならない．

III 人間行為の「目的論的な範疇」の定式化

事象の連続性から目的論的内容が除かれ，人間行為を探究する関心が高まっていくと，経済ないし社会をプロセスの見地から動態的に把握するようになる．この思想動向こそは，進化論的経済学への接近である．だが，功利主義的経済学の人間行為論は，能動的主体を定式化することはできなかった．ここから，ヴェブレンは，人間行為の定式化には二つの道が開かれていると考えていたことがわかる．

彼によれば，この問題は，定式化する行為が「意志決定力 discretion」を与えられているか否かということに関わっている．行為が意志決定力を与えられる場合の事象のプロセスは，「目的論的な範疇」に入る．それに対して，事象のプロセスにおける人間が意志決定力を与えられていない場合，「量的な範疇」になる（V 1900, 158）．受動的主体を取り扱う功利主義的経済学の人間行為論が後者であるとすれば，能動的主体を扱うことを繰り返し説いたヴェブレンが選ぶのは前者である．このような区分を見ると，彼の進化論的経済学の構想の輪郭も浮かび上がってくる．

ヴェブレンの構想において，自然を主とする目的論からの脱却が意味していたのは，機械論的な見地からの考察であった．そして定式化される人間行為は，目的論的人間主体でなければならない．これはヴェブレン自身の説明であるが，多少の言い換えが必要とされるだろう．すなわち，その構想は，社会における平凡な人間を，日常生活において自ら意志決定できる主体——目的論的人間主体——と捉え，道徳的ないし倫理的評価から切り離した上で——機械論的，道徳的に無色な，究極的目的を設定しない——取り扱うということを意味していると考えられる．

もっともヴェブレンは，経済学における量的な因果関係が不要であると主張したわけではない．ただ，正統派の代表者であるマーシャルや N.ケインズでさえも「社会における人間の経済活動から生じてくる現象」(N.ケインズ『政治経済学の領域と方法』の第 3 章）を取り扱わねばならないことに気づきはじめているのだから（ibid, 172），「量的な範疇」の諸概念を支えるためにも，この「目的論的な範疇」に属す諸概念——習慣，性向，適性および慣例——の探究が，今後は経済学の主題となるだろうという見通しを立てているだけなのである（ibid, 179）．

おわりに

これらの議論から，ヴェブレンが，正統派経済学を拒絶することで，まったく新たな枠組みとしての進化論的経済学を構築しようしたわけではなかったことが理解されよう．イギリスを中心とした経験論の伝統は，自然を主とした目的論的世界観から脱

却し，事象を動態的ないし進化論的に考察する方向へ向かい始めた．そのことは，一面では現象を事実に即して取り扱う観点を生み出すとともに，人間理解が歴史ないし社会を理解するための基礎となることを教えてくれた．ヴェブレンが進化論的経済学を新たに提案したことに違いはないが，彼の方法論における諸論点が過去の思想史における成果に根ざしていることは否定できないし，そのことを彼は十分に承知していたということができる．本来，進化論的という形容自体があまりにも曖昧な概念であるということができるかもしれないが，進化論的経済学の方法を思想史上に位置づけようとするとき，この点を念頭におかねばならないのではないだろうか．

この彼の方法論の意義をいっそう明確にするためには，より具体的な彼の経済理論とつきあわせる必要があろう．『有閑階級の理論』は，経済的動機のみならず，慣習的に受け継がれた真善美に関わる様々な心理的動機が経済的行為といかに密接に関わっているかを描いた．彼は（N.ケインズの同様の認識を引きながら），経済学が個別科学であるとしても，事実の範囲を限定するのではなく，人間の経済活動に対して意味を持つ限りにおいてあらゆる事実を扱わねばならないと考えていたからである（V 1900, 172）．だが，本報告における議論をふり返り，ヴェブレンの方法の独創性を意味づけるとしたら，それは，多様な経済的行為を描き出したこと，そのことにあるのではない．

ヴェブレンにとって，科学としての経済学は，究極的目的を設定した上で，経済社会を分析することではなかった．それは，社会における諸問題の善悪を直接に判定する権限は与えられていない．それにもかかわらず，彼が事実に即して描き出した人間社会は，階級間の所得格差や男女差別，高等教育における諸問題を読む者につきつける．科学としての経済学が，倫理的あるいは道徳的判定を直接には下さずとも，「目的論的な範疇」に入る諸事実を取り扱うことによって，それにまつわる社会の諸問題をいくらでも提示しうるのだということを，ヴェブレンは『有閑階級の理論』において示して見せたといえるのではないだろうか．

参考文献

Dorfman, Joseph [1934] 1972. *Thorstein Veblen and his America with New Appendices*. New York: Augustus M. Kelley. 八木甫訳『ヴェブレン――その人と時代――』ホルト・サウンダース・ジャパン，1985.

Edgell, Stephen 2001. *Veblen in Perspective: His Life and Thought*. Armonk, N.Y.: M.E. Sharpe.

Veblen, Thorstein 1884. Kant's Critique of Judgment. *The Journal of Speculative Philosophy* 18. Reprinted in Veblen (1994, X): 175-193.

――1898. Why is Economics Not an Evolutionary Science. *The Quarterly Journal of Economics* 12(4). Reprinted in Veblen (1994, VIII): 56-81.

――1899a. The Preconceptions of Economic Science, Part. I. *The Quarterly Journal of Economics* 13(2). Reprinted in Veblen (1994, VIII): 82-113.

――1899b. *The Theory of the Leisure Class*. Reprinted in Veblen (1994, I).

――1899c. The Preconceptions of Economic Science, Part. II. *The Quarterly Journal of Economics* 13(4). Reprinted in Veblen (1994, VIII): 114-147.

――1900. The Preconceptions of Economic Science, Part. III. *The Quarterly Journal of Economics* 14(2). Reprinted in Veblen (1994, VIII): 148-179.

――1994. *The Collected Works of Thorstein Veblen*. 10 Vols. London: Routledge / Thoemmes Press.